様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ２１４２６

研究課題名（和文）戦後70年間における高知県の「犬神」変容に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Transformation of "Inugami" in Kochi Prefecture for 70 Years after World War II

研究代表者
酒井　貴広（SAKAI, Takahiro）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：７０７５７２２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高知県西部の幡多地方を中心に、県下に今なお存在する民俗事象「犬神」について考察した。高知県下の「犬神」は、歴史的に様々な「強制力」からの働きかけを受け、今日では特異な変容を遂げている。さらに、戦後の高知県における「犬神」は、学術研究・生活世界・フィクション作品の三者の間で結び付き、時に相互作用を発生させながら今日の変容に至ったと結論付けられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I focused on the Hata district in the western part of Kochi prefecture, about the folk phenomenon "Inugami" still existing in the prefecture. "Inugami" in Kochi Prefecture has undergone historical encouragement from various "enforceability", and has undergone a unique transformation today. Furthermore, it is concluded that "Inugami" in Kochi Prefecture after World War II was connected among the three members of academic research, living world, and fictional work, and today it has undergone transformation with interaction occurring.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：憑きもの筋　地方史　相互作用　高知県　社会還元　公共性　生活学

１．研究開始当初の背景

問題点(1)―理論的展開の不足

研究代表者は、高知県下で今なお語られる民俗事象「犬神」[1]の研究を遂行した。文化人類学や民俗学を中心とする先行研究では、犬神は西日本で広く語られる憑きもの筋の一種とされている。憑きもの筋とは、動物霊を使役して周囲から富を奪い、災いをもたらす特定の家筋を指す。しかし、そうした家筋を指定する主体は周囲の人々や日本各地を流浪していた行者であり、憑きもの筋言説の実態は、特定の家筋に対する誹謗中傷を伴う攻撃的言説に他ならない。

特に敗戦後の社会不安を背景に憑きもの筋の言説が強い力を持った戦後期には、民俗学者を中心に憑きもの筋研究が興隆し、石塚尊俊〔石塚 1959〕や速水保孝〔速水 1957〕が、日本各地で語られる憑きもの筋言説の根底には、新来の入村者、あるいは新興地主といった急激に成功を収めた者たちに対する、社会の下層に留め置かれた人々からの「嫉妬」があると指摘した。さらに、1960 年代後半からは、吉田禎吾・綾部恒雄を中心とする九州大学の研究グループが、石塚から継承した高知県西部の幡多郡をフィールドに据えた社会人類学的研究を行い、憑きもの筋とされる人物と憑依されたと自称する人物の間には特定の関係性が見出だせること、憑きもの筋の言説が社会の安全弁として機能している面もあることを指摘し、文化人類学の視座からの憑きもの筋研究の基盤を築いた〔吉田 1972〕。1970 年代後半からは、民俗学と文化人類学を繋ぐ「妖怪学」の見地から、小松和彦が「説明体系」としての憑きものと、「ツキ」への着目を提唱し、憑きものの言説で人々は説明不可能な出来事を仮にでも説明しようとしており、その文脈で憑きものを解釈すると、何かが「ついている」ことを意味する「ツキ」にこそ憑きもの言説の重要な意味が秘められていると説く〔小松 1982〕。

近年まで憑きもの筋研究は継続されてきたものの、上記の民俗学、文化人類学、「妖怪学」の援用の趣が強く、新たな理論的展開が長らく提示されてこなかったという問題点が残されている。同時にこの問題点は、近年の学術研究においては、もはや「憑きもの筋」の言説が社会に働きかける何らかの機能や効力を有していないとの解釈が支配的であることを意味してもいる。

問題点(2)―演繹的研究手法が大部分を占める「憑きもの筋研究」

研究代表者は、(1)で挙げた問題点と並行して、憑きもの筋の先行研究は演繹的手法に依拠し過ぎているのではないかとの着想に至る。例えば、石塚の『日本の憑きもの』では、日本各地の狐持ちや犬神の事例集積から、憑きもの筋が数多く報告された出雲地方・高知県幡多郡・大分県北部の三箇所を「多数地帯」と命名し、それらが共有する機序を明らかにしようとしている。上記の通り石塚は日本の憑きもの筋言説の根底に「新来者への嫉妬」があると指摘するが、高知県幡多郡の事例では、犬神に指定された家筋の系譜を遡った結果、その家筋が新来者でも富裕層でもないことが明らかになったと述べているにも関わらず、その特異な状況に注意を払っていない。これは他の多くの憑きもの筋研究にも見出だすことのできる傾向であり、これまでの憑きもの筋研究は、演繹的視座から「憑きもの筋」に通底する要素が存在すると想定してきたため、それらの個別性を看過してきたと指摘できよう。

解決方策

研究代表者は、(1)、(2)で挙げた問題点を解決する手掛かりとして、速水保孝の指摘に注目する。速水は狐持ちと犬神を例として、狐持ち発生の根底には彼の唱えた経済的格差があるとしつつも、犬神には富貴の差と関係しない人間疎外の理論があると考え、日本各地に広がる「憑きもの筋」にはその憑依主体ごとに異なる機序が働いているのではないかと指摘する〔速水 1976〕。申請者は速水の指摘を下敷きに、日本全域に通用し得る「憑きもの筋の機序」を想定してきた演繹的な憑きもの筋研究の手法を一旦離れ、まずは特定地域のケース・スタディを遂行することで、問題点(2)を乗り越えられる可能性が高いとの着想に至った。さらに、事例から考える帰納的憑きもの筋研究が、問題点(1)の解決方策として機能する可能性があるとも想定している。

＜参考文献＞

石塚尊俊、『日本の憑きもの―俗信は今も生きている』、未來社、1959
小松和彦、『憑霊信仰論』、伝統と現代社、1982
速水保孝、『憑きもの持ち迷信―その歴史的考察』、柏林書房、1957
速水保孝、『出雲の迷信―「狐持ち」迷信の民俗と謎』、学生社、1976
吉田禎吾、『日本の憑きもの―社会人類学的考察』、中公新書、1972

２．研究の目的

本研究課題における最大の目的は、特定地域の事例研究から新たな憑きもの筋研究を立ち上げることである。この研究目的をより具体的に表現した下位分類を挙げると、以下の 3 点になる。

(1)「高知県」の「犬神」のケース・スタディ：速水が述べるように、「犬神」言説には他の憑きもの筋言説と相違があるのか。さらに、人々が「犬神」に対して抱く意識――「犬神」観――も変容しているのか。また、「高知県」の「犬神」言説や「犬神」観は徳島県など他地域のものとは異なるのか。

(2)学術研究の言説と地域社会の言説の関係：地方新聞やラジオを通じて積極的に社会

へ還元された「憑きもの筋研究」の言説が、地域社会の言説に影響を及ぼした可能性は考えられないのか。
(3)外部メディアによる情報発信とその影響：従来特定集団で共有されてきた憑きもの筋の言説が、社会の紐帯を離れた外部メディアを通じて人々に還元される際に、独自の影響が生まれるのではないか。

３．研究の方法

研究方法

「２．研究の目的」を、研究期間中に以下の方法で検討した。
(A)高知県西部での聞き取り調査：四万十市・黒潮町・三原村（かつて幡多郡に属した地域）のインフォーマントに半構造化インタビューを実施し、聞き取りデータを収集した（研究期間中に４回、合計約５ヶ月間）。
(B)一次資料の体系的収集に基づく歴史分析：「犬神」やその他憑きもの筋にまつわる文献資料（市町村史、地方新聞記事も含む）を可能な限り収集し、特に戦後期以降の「犬神」言説の歴史的変遷を探る。(A)のフィールドワーク中に並行して実施するとともに、高知県以外に存在する文献を必要に応じて収集した。

特色と独創的な点

本研究課題は、現在の「犬神」言説を「高知県」というフィールドに密着した形で明らかにしようとする点に特色がある。なぜなら、高知県における「犬神」言説の特徴を明らかにすることは、高知県の特殊性を示すとともに、徳島県などの近隣地域や学術研究の言説が、地域社会に及ぼした影響を導出するとも期待されたからである。さらには、外部メディアから発信された「犬神」言説が県下の生活世界に生きる人々――生活者たち――に及ぼした影響を示すことは、現代的な様相と旧来の民俗事象の結節点を示す独創性を有すると考えられた。

４．研究成果

研究代表者は上述した研究目的・方法を前提に、研究課題を下記の通りに遂行した。

(1)高知県の人々が抱く「犬神」観の質的分析

高知県での聞き取り調査の結果、高知県西部では多くの人々が「犬神」について今なお強く意識していることが明らかになった。しかし同時に、現在のインフォーマントたちが語る「犬神」は、もはや社会で共有される言説でなくなったために個々人の解釈に依拠した偏差を見せる一方、共有しない言説であるにも関わらず特定の差別問題と接近させて語られるという、相反する特徴を両立させている。この現況と先行研究に鑑みると、戦後期から現在までの約 70 年間で、高知県西部のインフォーマントたちの抱く「犬神」観が変容していると指摘できる。さらに、徳島県の賢見神社で神宮を務める夫妻の語りと比較すると、高知県（西部以外も含む）における強いタブー性と差別意識を伴った「犬神」観はきわめて特異な事例であることも明らかとなった。

(2)戦後の学術研究の社会還元過程の歴史的分析

高知県内外から収集した文献資料を集約した結果、高知県では、民俗学者や歴史学者に代表される多くの識者が、戦後の憑きもの筋研究を下敷きにした犬神批判の言説を形成しており、高知県下の人々も市町村史や地方新聞『高知新聞』の読者投稿欄などを通じて学術研究の言説に様々な反応を示してきたことが明らかになった。この知見は、高知県では新聞という外部メディアを通じた「犬神」の情報伝達が現在まで継続的に行われており、そのメディアを通じて当該地の「犬神」言説が看過できない影響を受けてきたことを示した。同時に、高知県においては、生活者たちも主体的に「犬神」に関する知識を発信し、自らが抱く「犬神」観を積極的に変容させてきたと推測できる。

ここで、「憑きもの筋にまつわる学術研究の発信した言説と地域社会における言説の相互作用」に着目すると、生活者たちによる憑きもの筋研究の利用法は様々であると表現できる。『高知新聞』紙上で人々が学術研究の成果を用いた手法の代表例を挙げると、学術研究の成果を生活世界にそのまま敷衍するもの（受容）、学術研究の言説と自分自身の「犬神」に対する解釈を融合させるもの（援用）、学術研究の成果に真っ向から対立するもの（拒絶）などが見出される。しかし同時に、生活者たちの言説には、学術研究の成果に全く触れない例がきわめて少ないことも指摘できる。ゆえに、学術研究の成果は、（生活者たちがそれらの言説を一切知らない場合を除けば、）常に生活者たちから「言及される」関係の下にあるとまとめられる。

さらに、『毎日新聞高知地方版』の記事を事例に、先行研究では実生活上の問題と明確に弁別されてきたフィクション作品群も、実際に当該地の生活者へ働きかけ、実社会における主体的な行動を促したことを示した。『毎日新聞高知地方版』に連載されている「支局長の手紙」[2]によると、高知県県出身の作家である坂東眞砂子の『狗神』に触発された伊賀憲司高知支局長が、実際に農村へ足を運び、当時の犬神にまつわる聞き取りを実施するに至ったとある。この記事に従うと、従来憑きもの筋研究の対象にされることの少なかったフィクション作品群も、（特に憑きもの筋の言説が強い機能や効力を発揮した社会において、）当該地の生活者に看過すべからざる影響を与えてきたと考えられる。

これらの知見から、高知県における「犬神」を巡る言説は、学術研究・生活世界・フィク

ション作品の三者の間で結び付き、時に相互作用を発生させながら今日の変容に至ったとの考察に至った。この知見は、自然科学的な実体を伴わない「犬神」の言説が、地域社会内外の言説――時にはメディア上の言説――から影響されてきたと読み換えることも可能である。

学術研究・生活世界・フィクション作品の三者の間に生じる合計 6 種の相互作用――人々の「犬神」観に内外からの変化を迫る「強制力」――についてまとめると、以下のような対応関係が指摘できる。「⑴学術研究の言説から生活世界の言説への働きかけ」については、憑きもの筋研究における研究成果の社会還元が対応しており、そうした実践的波及効果がかつての憑きもの筋研究を支えていたことは疑いないだろう。「⑵生活世界の言説から学術研究の言説への働きかけ」については、高知県の場合は、生活者による学術研究への様々な言及が対応している。もっとも、高知県の事例が他地域における憑きもの筋言説に援用できるのかという問題については、さらなる検証が必要である。坂東眞砂子の伝奇小説『狗神』、『鬼神の狂乱』を事例として、「⑶生活世界の言説からフィクション作品の言説への働きかけ」、「⑷学術研究の言説からフィクション作品の言説への働きかけ」が実行力を伴って存在することも確認された。⑷については、坂東の作品が⑶に該当する高知県下の伝承だけではなく、歴史学を主軸とする様々な学術研究を下敷きにしていることを指す。そして、発表されたフィクション作品が、『毎日新聞高知地方版』の例にある通り、「⑸フィクション作品の言説から生活世界の言説への働きかけ」としての力を有していたことも分かった。また、従来看過されてきた、フィクション作品の秘める学術的意義――「⑹フィクション作品の言説から学術研究の言説への働きかけ」――に対して、本研究が初めて注目したと言えよう。

これら 6 種の働きかけを総合すると、戦後の高知県下における「犬神」言説の変容は、近代化に伴う民俗事象の後景化として一般化できるものではなく、「高知県」というフィールド独自の要因が相互に影響し合った結果生じた事態であると結論付けられる。

(3)外部メディアによる情報発信と地域社会の言説との関係の分析

これらの分析に加えて、「２．研究の目的」における⑶の達成のためには、「犬神」に関して生活世界とメディア上の情報の間に生じる相互作用を明らかにする必要がある。しかし、高知県の「犬神」は今なお重い話題として扱われており、生活世界とメディア上の情報の間に相互作用が生じる機会があった場合でも、生活者たちが意図的に「犬神」に関して言及することを避け、そこに生じる相互作用や言説空間の拡大が見かけ上は小さくなる可能性も指摘できる。このため、あえて人々が「話題にできる」対象を用い、恣意的な操作が加わっていない状態での、両者の間の相互作用と言説空間の拡大を明らかにした上で、得られた知見から相対的に「犬神」にまつわる状況を推測することとした。

本アプローチにおいては、栃木県栃木市の家中地区で平成 13 年に創設された儀礼「強卵式」を題材に検証を行った。強卵式とは、鷲宮神社宮司・神楽保存会・コンサルタントの三者が創造した新設儀礼であり、儀礼に込めた思惑も三者の間で大きく異なっている。しかし、三者それぞれが「楽しみながら」「主体的に」儀礼を盛り上げようと立ち働いた結果、逆説的にメッセージ性の強い儀礼を構築するに至ったと考えられる。同時に、インターネットサイトに代表されるサイバー空間上における強卵式は、多くの場合、三アクターの思惑を外れた「奇祭」として再表象されるものの、この表現を三アクターたちも好意的に受け入れ、生活者の言説とサイバー空間（メディア）上の言説の間で、様々な相互作用が生じる状況を作り上げている。

上記相互作用に対する考察の結果、生活者たちとメディア上の情報が入れ子構造のもとで相互に働きかけることによって、両者の言説空間の内容を相互に変容させ、さらには言説空間そのものを急激に拡大させることが明らかとなった。この知見を高知県の「犬神」観に援用すると、おそらくは「犬神」について知る人々が、あえて生活世界における情報の共有や学術研究からの「強制力」に限定して反応していることで、高知県における「犬神」観変容の現況が生じていると推測できる。加えて、「犬神」にまつわる言説空間が急速には拡大しないことそのものが、高知県における「犬神」観が帯びる重い話題としての特徴を示していると結論付けられよう。

(4)まとめと今後の展望

本研究課題では、高知県幡多地方の「犬神」言説と「犬神」観を中心に議論を行い、県下の「犬神」観が歴史的に様々な「強制力」の働きかけを受け、今日の変容へ至ったことを明らかにした。本研究課題では、県下の「犬神」観が変容する歴史的過程を描き出したが、これは過度な一般化をあえて封じ、地域の独自性に立脚して議論を進めたことによる。

しかし同時に、本課題は高知県の事例研究に留まるものではないとの展望も抱いている。今後本課題の手法を援用した地域研究が、研究代表者を含む多くの研究者の手で篤実に積み重ねられることによって、地域の独自性を捨象しない――過度な一般化や抽象化を経ていない――研究の集積が成されるであろう。この段階に至って、日本の「憑きもの筋」を再度議論し、新たな民衆史を編纂することが可能となるが、本課題はその第一歩として位置付けられるものである。かつて文化人類学では、自然科学の手法を援用した厳密な定義付けに拘泥したことによって、僅かでも定

義を外れた事例に対応し得なくなる閉塞状況に陥った。この閉塞状況と同じ轍を踏まぬためにも、緩やかな定義付けによって多くの事例を研究の俎上に載せるよう努めるべきである。同時に、こうした定義付けによって、他とは異なる特徴を持つ事例も、必ず研究対象に挙がってくる。本課題で扱った高知県の「犬神」にも、先行研究の提示する「憑きもの筋」の定義から外れる要素が多々うかがえるものの、あえてこれを対象としたことで、高知県下の「犬神」観が変容する歴史的過程が明らかになった。換言すれば、反例にこそ新たな知見を導出する端緒が秘められていたのである。この研究手法は、来たるべき日本文化の包括的な議論においても、重要な貢献を果たすであろう。

「犬神」観や「憑きもの筋」の研究、さらには日本の民衆史を描出する試みが成し遂げられるには、今後多くの研究者の協働によって広範な知見が積み上げられなければならない。本研究課題では、それらの研究群を通底する問題意識の提示を試み、一定の成果を得られたと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

１）酒井貴広、査読あり、「地域住民とメディアの相互作用を基盤とする祭りの創造に関する研究—栃木市都賀町家中の「強卵式」を事例として」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、早稲田大学、62 号、pp549-566、2017

２）松田俊介、酒井貴広、査読あり、「儀礼の創出と地域住民のアイデンティティ表象に関する研究—栃木市都賀町家中の“強卵式”の事例から—」、『生活学論叢』、日本生活学会、30 号、pp1-14、2017

３）酒井貴広、査読あり、「学術研究が生活世界へ及ぼす影響に関する研究—戦後の「憑きもの筋研究」を事例として—」、『人間関係学研究』、日本人間関係学会、22 号 1 巻、pp13-26、2017

４）酒井貴広、査読あり、「「災害の予感」に関する文化人類学的研究試論—南海トラフ地震に備える高知市沿岸部を事例として—」、『早稲田大学大学院　文学研究科紀要』、早稲田大学、63、pp719-735、2018

〔学会発表〕（計２件）

１）酒井貴広、松田俊介、「祭りの創出と地域住民のアイデンティティ表象に関する研究—栃木市都賀町家中の“強卵式”にみる食物禁忌と伝統運営の生活史」、『日本生活学会』、A-3、新座市（埼玉県）、2016 年 5 月

２）酒井貴広、「戦後高知県における「犬神」の変容に関する研究—学術研究の文献資料を通じた社会への還元に注目して」、『日本文化人類学会』、C19、名古屋市（愛知県）、2016 年 5 月

６．研究組織

(1)研究代表者

酒井　貴広（SAKAI, Takahiro）
早稲田大学・文学学術院・助手
研究者番号：70757228

---

[1] 本報告書では、本研究課題で対象とした近年の高知県における「犬神」を括弧付きで記述し、先行研究が取り扱ってきた従来の犬神と区別する。

[2] 他地域の『毎日新聞』でも連載されていることを付け加えておく。